

メディアリテラシー教育における〈絵本〉の可能性

——『おちゃのじかんにきたとら』を補助線に——

内 藤 寿 子

A possibility of picture book in Media literacy education ——“The Tiger who came to tea” to the analysis object——

Hisako NAITOU

The picture book is the best for the teaching material of the media literacy education. Especially, when educating at the university or junior college, the picture book has the meaning as the teaching material. In this text, the picture book was analyzed from two sides, material feature of picture book and circulation form of picture book, and the meaning was clarified concretely.

1. はじめに

情報過多ともいえる現在、「実学」という側面からも、さまざまなメディアを〈読み解く技術〉の錬磨と、みずからの読解を他者へく伝える技術〉の修練が、大学教育に求められている。本校における、リベラルアーツ科目—「メディアリテラシー1・2」「日本語リテラシー1・2」—の設置も、このような需要にこたえる教育実践だといえよう。

〈読み解く技術〉を学ぶ「メディアリテラシー1・2」では、新聞やテレビ番組が題材として取りあげられ、〈伝える技術〉を学ぶ「日本語リテラシー1・2」では、受講生じしんの文章が教材とされる。が、リテラシー教育の題材の広がり、これらにとどまらない。今回、わたくしは、みずからの教育実践をもとに、メディアリテラシー教育における〈絵本〉の活用についてまとめることとした。

〈絵本〉とは、平易な言葉づかいの文章と図像で構成されたメディアである。総ページ30枚前後、

厚さ1cmにおよばない作品も多い。しかし、そこに満ちあふれる情報の様相を知るとき、「乏しさ」さえ感じさせた初見の印象はくつがえされる。

「メディアリテラシー1・2」の講義要項にもあるとおり、「メディアリテラシー」とは、ある情報体をいくつかの視点から分析し、その位相をとらえようとする試みである。〈絵本〉が、このような試みにふさわしい情報体だということを、『おちゃのじかんにきたとら』（ジュディス・カー作・晴海耕平訳 童話館出版 1994年）を例に、確認したい⁽¹⁾。具体的にいえば、これまでの講義において取りあげてきた視点のなかから、とくにふたつ—物質の側面から〈絵本〉を考える、流通の側面から〈絵本〉を考える—を選び、『おちゃのじかんにきたとら』の分析を試みる。

『おちゃのじかんにきたとら』の原題は、“The Tiger who came to tea”である⁽²⁾。初版は、1968年にイギリスで出版されており、およそ40年にわたり世界中で支持を集めてきた。絵本が日本語に



おかあさんは いいました。
「いったい だれかしら。」

ぎゅうにゅうやさん ではないはずよ、
だって けさ きたもの。



翻訳される過程では、「岩波子どもの本」シリーズのように、原書とは異なる版型で出版されたり、翻訳者の解釈が訳文に加えられるといった改変がみられる場合がある⁽³⁾。“The Tiger who came to tea” に関していえば、晴海耕平訳『おちゃのじかんにきたとら』(童話館出版 1994年)は、初版に忠実な作品だといえ、本稿では、この日本語訳版を資料として使っていく。

2. 物質の側面から〈絵本〉を考える

「あるところに、ソフィーというなまえの ちいさなおんなのこが いました。」という言葉ではじまる『おちゃのじかんにきたとら』は、つぎのような物語である。

ある日、ソフィーとお母さんが台所でお茶の時間にしようとしていると、突然、玄関のベルが鳴

[資料1]



ざっかやさんの おとこのこ でもないはずよ、
だって きょうは あのこの くる日ではないもの。



おとうさん でもないわ、
おとうさんなら かぎを
もっているもの。

ともかく、ドアをあけて 見てみましょう。」

り、大きなとらがたずねてきました。

「ごめんください。ぼく、とてもおなかが すいて
いるんです。おちやのじかんに、ごいっしょさ
せていただけませんか？」と、とらが礼儀正しく
お願いすると、お母さんは「もちろん いいです
よ。どうぞ おはいいなさい。」と迎えいれます。

ソフィーたちは、とらとのお茶を楽しみますが、
その食欲には驚かされました。ケーキから水道水
まで家中のものをたいらげ、「すてきな おちやの

じかんをありがとう。ぼくは、そろそろおいとま
します。」と、とらは帰っていきました。

とらが水を全部飲んでしまったので、ソフィー
はお風呂にも入れません。ちょうどそこへお父さ
んが仕事から帰ってきました。ソフィーたちから
今日の出来事を聞いたお父さんは、夕食を食べに
行こうと提案します。3人は、レストランで幸せな
ひとときを過ごしました。

そして、翌日。ソフィーとお母さんは買い物に

でかけ、とらがいつまた来てもいいように、タイガーフードのとても大きな缶詰を買います。けれども、とらは、あれから一度もあらわれませんでした。

『おちゃのじかんにきたとら』では、日常生活を描きながら、人間と動物が言葉をかかわすといった不思議な出来事が描かれる。古くから親しまれてきた民話とも通底するこのような話型は、英語圏においても日本語圏においても無理なく受け入れられるものであった。

しかし、〈絵本〉というメディアの場合、話型の効力だけでは世界的ベストセラーにはなれない。読者の支持を獲得するためには、話型と有機的に結びついた物質的要素の存在が必要なのである。

「文字のない絵本」という分類があることからわかるように、〈絵本〉というメディアは情報伝達的手段として、文字よりも図像を重んじる。それだけではなく、「本」という形態を支えるあらゆる物質的要素—表紙、見返し、扉、ノド、後ろ見返し、裏表紙、版の大きさや形、活字部分と図像のバランス、ページ構成など—をとおして、読者とのコミュニケーションを図ろうとする。ときに、まだ言葉も話せない乳児が〈絵本を読んでいる〉姿を目にすることがあるが、〈絵本〉というメディアの物質的要素は、そのような読書形態を可能にする力を備えているといえよう。

『おちゃのじかんにきたとら』に関していえば、ページ構成のはたらきは大きい。それは、冒頭部分からもみてとれる。来客を知らせるベルの音を聞き、ソフィーとお母さんは相手を推測する。しかし、答えは出ない。そこで、「ともかく、ドアをあけて 見てみましょう。」と決める〔資料1 参照〕。このとき、ソフィーとお母さんの前にだけでなく、読者の前にも〈ページというドア〉が置かれているのである。ソフィーとともに「読者であるわたく

し」も、〈ドア/ページをあける〉。するとそこには、「おおきくて 毛むくじゃらの、しまもようのとら」がいた〔資料2 参照〕。

左のページに謎があり、右のページに答えがあつては、謎に対する興味の高まりは維持されない。「ともかく、ドアをあけて 見てみましょう。」との文字があり、隠されていた「おおきくて 毛むくじゃらの、しまもようのとら」の図像が時差をもって登場するからこそ、日常におとずれた非日常の不思議さが、より効果的に読者へと伝えられるのである。ページという物質的要素を舞台に、既知の話型が新たに演出されていく。このような重層性は、およそ40年にわたり世界中の読者を惹きつけてやまない。

メディアリテラシーに関する科目の受講生の多くは、〈読む〉とは視覚だけの行為だと当然のように思いこんでいる。しかし、「点字」の例をだすまでもなく、実際は、全身のはたらき、全感覚をつかって、メディアを構成するあらゆる要素をとらえる行為なのである。

『おちゃのじかんにきたとら』を〈読む〉場合は、〈ページをあける〉という体の動きが特別な意義をもつが、和本のように〈紙の手触り〉が〈読む〉ことと密接に結びついているメディアもある。また、40代~50代の男性を読者に持つ『LEON』（主婦と生活社）は、近年もっとも成功した雑誌といわれているが、その創刊準備号（2001年6月）の付録は「ブルガリのおしぼり」であった。岸田一郎編集長は、「高級であるけれども実用」というこの雑誌のコンセプトを、記事内容以上に付録に込めたのだという〔4〕。付録も〈読む〉べきなのである。

『LEON』だけでなく、現在、情報の送り手側は、メディアの物質的側面を積極的に利用し、より巧みに伝達内容を編集しようと試みている。この現状に鑑みれば、メディアリテラシー教育において展開すべきことは、「ブルガリのおしぼり」からも

ソフィーは、
ドアを あけました。
すると そこには、
おおきくて 毛むくじらの、
しまもようの とらがいました。

とらは いいました。
「ごめんください。ほく とても
おなかが すいているんです。
おちゃのじかに、
ごいっしょさせて
いただけませんか？」

おかあさんは いいました。
「もちろん いいですよ。
どうぞ おはいりなさい。」



情報を〈読む〉という意識を受講生のなかに根づかせることだと思われる。成長過程で、だれしものが手にしてきた〈絵本〉というメディア。そのような身近なメディアを物質的側面から考える行為は、素朴な読者を批評的な読者へと脱皮させる第一歩となる。

3. 流通の側面から〈絵本〉を考える

一般に書籍は、出版社→取次会社→小売店→読者という経路で流通していく。が、『おちゃのじかにきたとら』の場合、「童話館ぶっくらぶ」という独自の流通経路をとおして、読者を獲得してきた作品だともいえる⁽⁵⁾。

1982年にはじまった「童話館ぶっくらぶ」は、のべ15万世帯が利用している日本国内最大の絵



けれど とらは、あれから ^いども あらわれませんでした。

本宅配サービスである。その特徴は、以下の5点にまとめられる。

- | | |
|--|--|
| <ul style="list-style-type: none"> (1) 0才から成長年齢に応じた配本コースが設定されている。申込者には、各コースのラインアップから毎月定期的に絵本が郵便で届けられる。 (2) 20年にわたり絵本研究が積み重ねられている。配本作品は、およそ30社の専門出版 | <ul style="list-style-type: none"> 社の刊行物から厳選されている。 (3) 童話館出版と提携し、絶版作品の復刊などをおこない、その成果を「童話館ぶっくらぶ」の配本に反映させている。 (4) 童話館出版の刊行物など、流通コストが押さえられる作品は会員特別価格で頒布される。 (5) 相談窓口である「ぶっくらぶサポートセンター」が設置されている。会報誌『童話 |
|--|--|

館ぶっくくらぶ通信』などもとおし、利用者との交流が積極的におこなわれている。

『おちゃのじかんにきたとら』とは、このような「童話館ぶっくくらぶ」の縮図だともいえる。童話館出版と「童話館ぶっくくらぶ」の提携のもと復刊されて以降、この作品は「大きいくるみコース」（およそ4〜5才向け）などに組みこまれ、現在にいたるまで配本されつづけているのである。そして、「ぶっくくらぶサポートセンター」に寄せられた利用者の声は、『おちゃのじかんにきたとら』の読者が確実に広がっていることを伝える。

『おちゃのじかんにきたとら』は、子ども達が言葉を覚えてしまうほど、何度も選んでくる一冊です。ソフィーという女の子とお母さんが、お茶の時間にしようとしていると、突然、おなかをすかせたとらが、しかし紳士のようにつつましく、玄関にあらわれ、お茶の時間に入れてもらいます。そして、すすめられるままに、サンドイッチをぜんぶ、パンをぜんぶ、ビスケットもケーキも牛乳もお茶も、ぜんぶたいらげてしまうのです。（子ども達は、ここで「ぜんぶ、ぜんぶ」とうれしそうに合唱します。）そしてまた、礼儀正しく帰って行くのです。そこへ帰宅したお父さんは、じっくりお母さんとソフィーの話聞いてくれて、「レストランへ行こう」と提案してくれるのです。

子ども達は『おちゃ・とら』に会いたいなあと言います。ソフィーのように、とらに乗ったりしつぽにほおずりしたいらしいのです。子ども達にとって楽しいことがいっぱいあった絵本は、いつか私も大好きになっていました⁽⁶⁾。

さらに、〈絵本〉という視点に立ち、「童話館ぶっくくらぶ」の活動をふまえて考えてみると、現在の書籍流通の問題点が浮かびあがってくる。

コンビニエンスストアにおける雑誌・書籍コーナーの充実や、アマゾンなどのインターネットサービスの発展により、生活圏から書店が駆逐されつつある。書籍をめぐるこのような流通形態の変化は、便利さへの希求から押し進められているものであり、一概に否定できない。

しかし、はたして、『おちゃのじかんにきたとら』が並べられたコンビニエンスストアの棚を、目にしたことがあるだろうか。短期間での販売部数がなによりも重視されるここでは、『少年ジャンプ』や『文芸春秋』と『おちゃのじかんにきたとら』が同じ位置を占めることは許されない。コンビニエンスストアとは、メディアの価値を販売部数と売上高に還元する場所だといえるが、このような閉鎖性は日常の便利さのかげで忘れ去られていく。

一方、コンビニエンスストアとは対照的に、インターネットサービスを利用すれば、数万冊もの絵本が瞬時にたちあられる。しかし、中正にみえるその検索結果も、実際は検索件数などをもとに序列化されており、ときに「数の論理」が編集した情報がメディアを選ぶ眼を曇らせることがある。

たとえば、『おちゃのじかんにきたとら』の裏表紙には、「読んであげるなら およそ3才くらいから」とあるが、この言葉からもわかるように、制作側—物語の作者、絵の作者、翻訳者、編集者たち—は、読者の発達段階や知識量を想定しながら〈絵本〉を作る。読者—ここにはもちろん、子どものために〈絵本〉を探す両親や、配本のために〈絵本〉を集める「童話館ぶっくくらぶ」の担当者も含まれる—は、文字と絵の配置、ルビの有無や活字の大きさなどの要素から制作側の配慮を読みとり^(〔資料3〕参照)、その作品が自身の能力や嗜好、用途に見合うかどうか判断する。〈絵本〉の選択において、まず参照とされるべきものは、このようなメディアを構成する要素であり、検索件数といっ

た情報ではない。

流通形態が急速に変化しつつある現在、〈絵本〉を含めた書籍メディアを、「数の論理」つまり直接的な経済効果をもとに評価する傾向が強まってきている。このような現状に対し、メディアリテラシー教育がなすべきことは、メディアの〈価値〉の多様性を伝えることだろう。

もちろん絵本も商品であり、『おちゃのじかんにきたとら』の裏表紙には「1,238円」と本体価格が印刷され、刷数からは販売部数をよみとることができる。が、それと同時に、このメディアはかならずしも数字には還元できない〈価値〉を内包している。

一例をあげれば、「童話館ぶっくらぶ」の試みとして、「職場への配本サービス」がある。このサービスが提案された背景には、「子どもへのお土産に絵本を持ち帰る」という行為それじたいが、親子関係の再構築につながっていくとの認識が流れている。コミュニケーションのなかだちとして働きうる〈絵本〉というメディアの〈価値〉が、「職場への配本サービス」をとおして、明らかにされようとしているのである⁷⁾。

流通形態とは、送り手から受け手へメディアを届けるための単なる手段ではない。メディアが流通形態を意義づけ、流通形態がメディアを意義づけるのであり、二者の相関関係からも〈価値〉が生じる。『おちゃのじかんにきたとら』と「童話館ぶっくらぶ」の結びつきは、その具体例のひとつだといえよう。

4. おわりに

大学におけるメディアリテラシー教育の場で、教材として〈絵本〉を取りだす。その瞬間、嬉しそうな眼に気づくこともあれば、失望に満ちたまなざしに射ぬかれるときもある。「幼稚園で読みま

した」との声もあがれば、あからさまな不満も流れる。

共感であろうと反感であろうと、受講生の反応には「絵本とは、子どものためのもの」という見解が通底している。が、本稿で述べたようなかたちで物質や流通の側面から分析するまでもなく、たとえば『おちゃのじかんにきたとら』をめぐって記された以下の文章を前にするだけで、受講生たちの先入観はもろくも崩れる。

仕事もなく、慣れない土地で子育てに追われていたことや、さまざまなことが原因していたと思われまます。私はいつしか、良い妻、良い母、良い嫁を演じることでしか自己確認できなくて、それが生きがいであると同時に、大きな負担にもなっていたのです。家事全般にわたって、完璧主義を自分に押しつけていました。[中略]ところが、ある頃から、完璧にしようと思えば思うほど失敗したり、まったくできなくなってしまうようになりました。自分に自信がもてないのです。品物選びで買いものに時間がかかったり、衛生面などささいなことが気になって、作りかけの料理を捨ててしまったり、簡単な料理にとっても時間がかかったりする状態でした。なにもかも、自分で抱えこもうとすることに無理があったのでしょうか。ジレンマに気づきかけていたのですが、どうすることもできません。

そんな時に出会ったのが『おちゃのじかんにきたとら』です。[中略] ストレスからくる私のこのような状態こそが、まさに“とら”だったのかもしれないと、気づきました。とたんに胸のつかえがすーっと消えて、気持ちが軽くなりました。[中略] この絵本を読み終えた時、私も家族のために料理するエネルギーを、少しもらえたような気がしました。翌朝、買いものに出かけるお母さんの姿が楽しそうですもの。それにしても、お母さんが淡々

ととらをもてなし、ソフィーがとらと仲よくしている絵は、何度見ても、私にふしぎな安心感をもたらしてくれます⁽⁸⁾。

「子どものために音読する母親」も〈絵本〉の読者である。しかし、「絵本とは、子どものためのもの」といった偏見は、かつて経験したはずのこのような読書形態を忘れさせている。〈絵本〉に対する共感あるいは反感を補助線に、受講生はみずからの視点の偏りに気づき、メディアリテラシー教育—〈読み解く技術〉の錬磨—が、ここからはじまっていくのである。

日本では1989年に第一歩を踏みだした「NIE (Newspaper in Education) 運動」は、現在、全国的な広がりをみせており、小・中・高校教育に新聞が積極的に取り入れられている。だが、その結果、メディアリテラシー教育の教材が新聞に画一化されてしまうという問題もおこりつつある。

このような現状をより良い方向へと進めるためにも、大学のメディアリテラシー教育においては、教材のバリエーションが求められているのではないだろうか。受講生のみならず教える側にも、「だれしものが、絵本の読者になりうる」という視点の転換が必要であると、わたくしには思われる。

注

- (1) 本文および[資料1][資料2][資料3]の引用は、ジュディス・カー作・晴海耕平訳『おちゃのじかんにきたとら』(童話館出版 2001年 改訂新版第9刷)による。本稿をまとめるにあたり、川端強氏(こどもの本の童話館グループ代表)・平野逸子氏(童話館出版)はじめ、多くの方にご協力いただいた。この場をお借りし、お礼申しあげたい。
- (2) 『おちゃのじかんにきたとら』の作者ジュディス・カー(Judith Kerr)は、1923年にベルリンで生まれた。父親アルフレッド・カー(Alfred Kerr)は、ナチス党の焚書政策の対象となった演劇評論家・

小説家である。1933年家族とともにドイツを離れ、36年イギリスに到着。市民権を獲得し、ジュディス・カーは、現在でもイギリスに暮らしている。『おちゃのじかんにきたとら』にならぶ代表作として、ヒトラー時代の経験を描いた3冊の自伝的小説“When Hitler Stole Pink Rabbit”(1971年)“Bombs on Aunt Dainty”(1975年)“A Small Person Far Away”(1978年)があり、このなかの第一作は、『ヒトラーにぬすまれたものいろいろさぎ』(松本亨子訳 評論社 1980年)という邦題で翻訳されている。また、ジュディス・カーは作家としてだけでなく、BBCテレビの脚本家として活躍した経歴も持つ。

- (3) 「岩波の子どもの本」は、1953年12月から現在にいたるまで刊行されつづけているシリーズである。このシリーズをとおして、コールドコット賞(1937年に開始、米で出版された最優秀絵本の画家に与えられる賞)受賞作などが紹介され、欧米の絵本が翻訳・出版されていく土台が作られた。しかし、「岩波の子どもの本」シリーズは大きな問題もはらんでいた。たとえば、低価格を維持するために版型(20.5cm×16.5cm)などが統一されたが、その結果、原書を改変しなくては翻訳・出版できない作品も出てきてしまった。「岩波の子どもの本」第6作『ちいさいおうち』(バージニア・リー・バートン作 石井桃子訳 1954年/1942年原書発行、43年コールドコット賞受賞)を例にあげれば、表紙じたいの一部改変や物語の省略がみとれる。なお、『ちいさいおうち』は、1965年に原書と同サイズのものが岩波書店より発行された。
- (4) 岸田一郎『LEONの秘密を舞台裏』ソフトバンク・パブリッシング 92~99 2005年
- (5) 「童話館ぶっくらぶ」に関しては、おもにつぎの資料を参考にした。
パンフレット『こどもの本の定期便』(こどもの本の童話館グループ発行)
『絵本のある子育て』(No.2 こどもの本の童話館グループ発行 2005年)
こどもの本の童話館グループホームページ(<http://www.douwakan.co.jp>)
川端強編『絵本の森の魔法の果実』童話館出版 1999年
この本には、「童話館ぶっくらぶ」の利用者139人の声がおさめられている。絵本というメディアの受容のされ方を考えるうえでも、貴重な記録だといえる。
- (6) O・E(山口県 33才)「私の子ども達を、毎月の

絵本たちが、どれだけ育ててくれていることか。」

前掲『絵本の森の魔法の果実』90～93

- (7) 財団法人出版文化産業振興財団発行『この本 読んで!』(第14号 2005年春号)によれば、「児童書専門店」は全国に129店舗あるのだという。しかし、その広がりは一均一ではなく、店舗は東京都内に集中しており、たとえばリストには秋田県に

住所をもつ「児童書専門店」はない。「童話館ぶっくらぶ」は、絵本をめぐるこのような格差を是正する役割も担っている。

- (8) E・S(鹿児島県 39才)「『おちやのじかんにきたとら』, 何度見ても, 私にふしぎな安心感をもたらしてくれます。」前掲『絵本の森の魔法の果実』313～315